

注解『七十一番職人歌合』稿(十)

下 房 俊 一

凡例

- 一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第二十三番および第二十四番の注解を取めた。なお、二十三番までが「上」巻、二十四番から「中」巻に入る。
- 一、第二十四番について、底本は行の下部を欠いている箇所があるので、を付して私に補い、それを基準として諸本との異同を示した。

二十三番 御簾編 唐紙師

〔職人尽〕

〔鶴岡放生会職人歌合〕七番右 御簾編

夕まくれこすの間とほる月影はくまなきよりもあはれなるかな

夜なくは思かくるをあしすたれなとふしくのあはすなりけん

判云、月は……右は、時も夕のまきれ、月もかすかなる程なれば、たとへなかるへきを、心ちあるさまのすてかたさに、持と申侍ぬる。よのつねの判者はあさけり侍らんかし。恋は……右のすたれ、秀句にかゝりて侍れと、一ふ

注解『七十一番職人歌合』稿(十)

しあるに似たり。為勝。

〔大団〕寄簾恋 匂ひ来る伽羅が中立ちするやらんしきりに鈎簾の内ぞ恋しき 〔人倫訓蒙図彙〕翠簾師 唐土の楊竹氏といふ者、車の物見にかけんために作れりと。日本にては、崇神天皇の御代にあり。禁裏みす師、富小路竹屋町下ル丁和泉、烏丸竹屋町徳助、同三右衛門。民間に用る雑品の簾は、伏見にこれを造る。又、伊予簾、京に上す也。江戸本吉原徳方、京橋一丁目市左衛門。 唐紙師 諸の紋を付けて色絵をなす。襖、障子、張付をなす。 〔用明天王職人鑑〕職人づくし 桜が色に花塗りの、吉野漆の塗師屋蒔絵屋檜皮屋に、軒の御簾屋の玉簾、伊予の守とも召さるべし。 〔俳諧職人尽〕みすあみ 翠簾かけて誰が妻ならん涼み舟 秋色 身半分花に隠れて編む簾 岩城 芳津 かがぐる歎みすあみ仕舞ふ雪の暮れ 羊素 みすあみや竹に雀の子持ち筋 水戸 遊璘 翠簾編の夜なべ邪魔するさかり猫 栢庭 暖簾から簾や軒も衣替へ 万船 編むみすや垂るるを待たぬ秋の風 寸龍 風寒し旭織り込む翠簾の綾 調羽 みすあみも脂な忘れそ月の秋 秀室 春風やゆかしたねのみす作り 万珠 みすあみやふしの間に間に横霞 尺子 おもしろやみすに柳の竹配り 素葛 翠簾あみやかざして見れば片時雨 白圭 みすあみのをのが手元や雁の空 拾翠 かほる風誰にもらさん翠簾作り 鋤之 初雪やみす屋も簾かかげけり 川何 恋よ猫美寿屋の妻もたち姿 菱和 唐紙師 たつ波はから紙ばかり汐干かな 夏人 からかみに水と雪との寒さかな 志諷 紅葉を惜しむ手品やから紙師 園芝 あつらへて二尺に咲くを菊の花 可圭 待つ春の唐紙帳や君が膝 和尺 から紙の桐も天下の秋なれや 菱和 今様職人尽百人一首 みす作り 手繰りかけて御簾や編むとも巻かぬ間に房うちかけし大内の殿 「やはり縁はいくぶかけだの」 「なみさ。大方紅絹がかろう」 地唐紙 唐紙に風の当たりしもぢぬのはきらひきとめぬ型ぞつきけり 「すつきと型が埋まつた。また新しく彫り直させふ」 「これはてうからの受け取りか。紺青が薄いの」 〔彩画職人部類〕鈎簾 又翠簾 風雅集 雨晴る、風はおりく吹き入れて小簾の間句ふ軒の梅が枝 永福門院内侍 〔職人尽発句合〕二十三番左 翠簾師 さりはたりみす織る軒の虫の声 左右ともに、生業に心入れたるに、よき持にて侍る。 五十三番右 唐帟師 摺り込みの濃き紫や藤の丸 唐紙の藤の丸、濃き紫の摺り込みもよき模様にして、いづれも当道を述べしが、蒔絵の光こそなを勝るべけれ。 〔職人尽狂歌合〕から帟師 時鳥声は霞に雲形を押す

唐帟やおしてしば鳴け 左、あながちにせめてすることを俗にはおすと云へば、それを秀句にとられし、よろし。右……：勝とこそ定め申すべけれ。 / みすあみ 是とても雲井道具と編む御簾の耳を揃へて聞くほととぎす 左、雲井道具、めづらかなる心地し侍り。右……：勝たるべし。 / みすあみ 忍び音の洩れてこそ聞け御簾造雲井にかける山郭公……：右、これも大方には侍らず。但し、簾はかくるところこそ申すべけれ、かけるとは無下のひなびごと侍り。かうやうの誤りは、我が師なりける人は常にいたく戒めてこそその給ひしか。此の頃はややみだりになり侍り。仍以左為勝。 / みすあみ 香炉峯の雪の卯の花咲く頃に御簾打ち上げて聞く時鳥……：右、清少納言のふることにて、雪の卯の花御簾打ち上げてなど申されし、かうさくにおかしと覚え侍り。ことにたくみに聞こえ侍れば、勝の字を加へ侍りつ。 / みすあみ 氏なくて御簾編む身にも耳果報ちと職過ぎる初郭公 左、山がつと人は言へどもなど詠みたれば、ここには職に過ぎたりとある、さもや侍らん。……：帟すきの方、勝りぬべくや。〔江戸職人歌合〕十八番左 御簾壳 卷かずとも月にはよしやよしすだれ管なきをのみ見るもあやなし 左右共有「感氣」。判云、左右の歌ともに姿詞満ち足らひて、判者も感涙押さへがたく侍り。よき持にても侍るべけれど、……：(右)為勝。管すだれ世々の契りのむなしきは思ひ出づべき一節やなき 左右共申旨なし。判云、左右哥、詞同等歟。可_レ為_レ持なり。

【本文】

廿三番

雪とみてまきあくるかなたますたれ
いとさやかなる秋の夜のつき
そら色のうす雲ひけとから紙の
したきら、なる月のかけかな

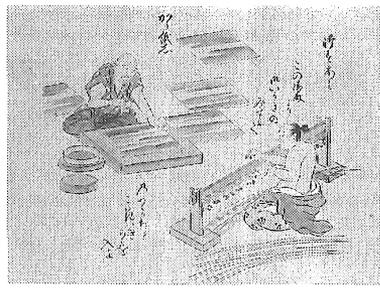
左は、かの雪の朝のすたれを、月に引かけ
て詠。右は、五文字はしめて、からかみの心

まきあくる―〔類〕卷あくる たますたれ―〔類〕玉すたれ
秋の夜のつき―〔類〕秋夜の月
そら色のうす雲―〔類〕空色の薄雲
かけ―〔類〕影
すたれ―〔類〕簾
詠―〔類〕よむはしめて―〔類〕始て からかみ―〔忠〕唐紙〔明〕から紙
〔類〕から帟

つよくきこゆ。よき持なるへし。
 人目さへあなはつかしや、ふれみす
 まろねはかりにあかすよは哉
 ひとこ、ろか、らましかはひねのりの
 なに、つけてもはなれかたきを
 左、みすのまろね、右、ひねのりのはなれ
 かたき、何につけても可為持。

◇ ◇

御すあみ
 この衛殿より
 御いそきの
 みすにて。
 から紙し
 のりかちと
 こはきは。き
 ら、を
 入よ。



つよく〔類〕強く
 人目〔類〕人めはつかしや〔類〕恥かしや、ふれみす〔忠〕〔明〕〔類〕
 まろね〔類〕丸ね 哉〔尊〕かな
 ひとこ、ろ〔類〕ひと心 ましかは〔白〕ましかば
 なに、〔類〕何に はなれかたきを〔類〕離かたきを
 何に〔類〕なに、

御すあみ〔白〕翠簾屋〔忠〕廿三番翠簾屋〔類〕翠簾屋
 この衛殿より御いそきのみすにて〔白〕新御所の御わたましちかつきて
 いそかわしきよ〔忠〕新御所の御わたましちかつきていそかわしきよこの
 衛殿より御いそきのみすにて〔類〕新御所の御わたましちかつきていそかはし
 きよこの衛殿より御いそきのみすにて
 から紙し〔白〕〔忠〕唐紙し
 のり〔白〕〔忠〕糊
 こはきは〔白〕〔忠〕〔類〕こはければ
 入よ〔類〕いれよ

【語注】

◎唐紙は、本来は中国渡来の厚手の紙であるが、転じて、その紙質をまね、唐紙風の色模様を施した和製の紙をもいう。唐紙師は、型木などを用いて、後者の意の唐紙を作り、またそれを張って唐紙障子を作る職人。職人歌合に初出だが、これに似た職人としては、『三十二番職人歌合』九・二十五番左に表補絵師、十二番本『東北院職人歌合』二番右に経師（五番本では判者）が見える。なお、経師は、本職人歌合二十六番右にも見える。

御簾編は、御簾を編む職人。白石本は「翠簾屋」、忠寄本は「翠簾屋^{みすあひ}」、類従本は「翠簾屋」とする。「御簾編」は『鶴岡放生会職人歌合』七番右に見える。

両者はともに建具類の製作にあたることから、番いとされたのであろう。

◎雪とみてまきあくるかなたますたれ 『白氏文集』十六、「香炉峯下新ト山居草堂初成偶題東壁」詩の句、「遺愛寺ノ鐘ハ敬^レ枕ヲ聴^キ、香炉峯ノ雪ハ撥^レ簾ヲ看^ル」、ないし、それを踏まえた、『枕草子』二百九十九段、「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、『少納言よ、香炉峯の雪いかならん』と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ」云々を典拠とする。ただし、ここは、「雪と見て」とあるように、月明かりを雪と見まがえて、簾を巻き上げた、というのである。月明かりを雪と見るといふ発想は、多くはないが、「衣手は寒くもあらねど月影をたまらぬ秋の雪とこそ見れへ貫之」（後撰集、六、秋中）、「久堅の空さえわたる冬の夜は月の光も雪かとぞ見る（祝部成仲）」（新拾遺集、六、冬歌）などの例がある。なお、「玉簾」は、玉で飾った簾とも取りうるが、ここは、単に、簾の美称と見るのが自然であろう。

◎いと 副詞の「いと」に、「簾」の縁語「糸」を掛ける。

◎秋の夜 類従本は「秋夜」とあるが、「秋の夜」と読むのであろう。

◎そら色のうす雲ひけと 唐紙に空色の薄い雲形模様（絵に描かれている刷毛目模様がそれであろう）を引いても、の意に、空に薄雲が棚引いているけれど、の意を掛ける。

◎から紙のしたきらゝなる月のかけかな―「きらら」は、雲母のことで、ここは、唐紙の下地に散らした雲母の細片をいう。それに、月の明るくきらめく様を言い掛ける。ただし、「きららなり」という形容動詞は管見に入らない。似た言葉に、「きららかなり」（形容動詞）、「きららし」（形容詞）があるが、いずれにしても、和歌に用いられるような言葉ではない。ここは、雲母の「きらら」に強引に引き寄せて、造語したものである。空色の雲形を引いた唐紙の下地に、雲母が散らしてあるように、薄雲の後ろできらめいている月。なお、この歌について『貞丈雜記』十四は、「古より雲母を引きて空色などの雲形やうの物を模様につけたる事と見ゆる也」という。

◎かの雪の朝のすたれを、月に引かけて詠 「かの雪の朝の簾」は、前述の、『白氏文集』の詩句、ないし『枕草子』二百九十九段の逸話による。「引かく」は、関連づけること。「簾」の縁で言う。

◎五文字はしめて―「空色の」という初句を始めとして。

◎からかみの心つよくきこゆ 唐紙は、『源氏物語』鈴虫に「唐の紙はもろくて、朝夕の御手ならしにもいかが」とあるように、もろい紙であったが、唐紙障子に用いられるところから、強いという印象があったのかも知れない。しかし、この「からかみ」は「韓神」で、韓神の心が強い、すなわち、荒々しい、ないし、頼もしいと解するのがよいかと思われる。そのように製品の唐紙をうまく詠み込んでいる、というのである。

◎人目さへあなはつかしや すぐ下の「破れ御簾」に続き、破れ御簾を恥ずかしく思う、という意味と、下句の「まろねはかりにあかすよは哉」に続き、人目を恥じて、恋しい相手と逢うことができないと嘆く意味とを兼ねる。感動詞の「あな」に、「破れ御簾」の縁語「穴」を掛ける。

◎まろねはかりにあかすよは哉 「破れ御簾」の縁語「間」[※]（「間」は単に「御簾」の縁語と見てもよいが、今の場合、「破れ御簾」だから一層隙間が開いているのである）から、「丸寝」と続ける。「丸寝」は、帯を解かずに着物を着たまま寝ること、すなわち、恋の歌では、独り寝すること。毎夜独り寝をする、というのである。

◎ひねのり 未考。『日本職人辞典』に「糊が古くなって、こわばり付く物」（「唐紙師」の項）とし、『ヴィジュアル史料日本職人史』^{〔I〕}も、「古くなった糊」（「唐紙師」の項）とするが、「何に付けても離れがたき」に続くか

ら、粘着力の強い糊でなくてはならない。「ひめのり（姫糊）」の転化かと思われるが、確証はない。

◎ひとこゝろかゝらましかは あの人のがこのよう（第三句以下に述べる私の心と同じよう）であればなあ。

◎なに、つけてもはなれかたきを 「何につけても」に、何にくっ付けても、何かにつけての意とを掛ける。

ひねのりが何にくっ付けても、よくくっ付いて離れにくいように、私は、何かにつけてあの人と離れたい思いがするの。あの人の方も同じような思いでいてくれればなあ、という気持ち。「何につけても」は、「難波江やなににつけても葦の根のうき身の程ぞあはれなりける（鷹司院按察）」（玉葉集、十五、雑歌二）のような例もないではないが、歌にはあまり用いられない言葉。俗語的な語感が強かったであろう。それを、ひねのりの縁であえて用いた。

◎何につけても可為持 何かにつけて、結局は、持とすべきであろう。右歌の「何につけても」の句を、そのまま判詞に用いて、茶化したのである。

◎御すあみ 白石本、忠寄本は「翠簾屋」、類従本は「翠簾屋」。

◎この衛殿より御いそぎのみすにて 白石本は、この言葉はなく、代わりに、「新御所の御わたましちかつきていそぎのみすにて」と校合する。類従本も、忠寄本とほぼ同じ。これら二種類の言葉について、岩崎佳枝「『七十一番職人歌合』成立年時考」（『文学・語学』九六号、昭和五十八年一月）は、近衛殿の新造の御所への移徙が近づき、ご下命の御簾を間にあわせねばならず忙しい、という同一の事態を言っているであろうとし、その移徙とは、上立売小川通東にあった近衛邸が明応九年七月二十八日の柳原大火で焼失、その後再建がはかられ、同年十二月十四日、一家が新邸へ移り住んだ、その時のことであろうとする。今、これに従う。なお、同論は、序文の解釈（序文語注「金殿の光ことなるみきり」の項参照）と併せて、当職人歌合の成立年時を、明応九年十月二十五日以後、遅くとも明応十年の初めごろと推定する。

◎のりかちとこはきは。きらゝを入よ―「こはきは」は、白石本、忠寄本、類従本は、「こはければ」。『中世職人語彙の研究』は、類従本によって「のりがちとこはければ、きらゝをいれよ」と読み、「糊のこわいときは雲母を入

れて、軟らかくゆるくする法がとられていたことが知られる」（「からかみ師・きらら」の項）とするが、はたしてそのような技法があったかどうか。語法的にも無理があるように思われる。東博本系の本文に従うなら、「こはきは」の「は」は終助詞で、ここで文が切れると見るべきであろう。その場合、「糊がちと強きは」は、唐紙を障子に張るための糊について言っているとも考えられるが、「きららを入れよ」との関係からすると、唐紙に散らすために雲母を糊に混ぜるのであろうか。いずれにしても、絵との関係がはっきりしない。

【絵】

御簾編は、諸肌脱ぎで袴をはき、編み機の前に坐して御簾を編む。編み機は、編み糸の先に提げた玉を前後して編むもので、鶴岡放生会職人歌合七番右、御簾編の絵に描かれるところから現代の物まで、基本的には変わっていない。前と横に、竹か葦などと思われる材料の束を置く。白石本、忠寄本の御簾編は烏帽子を被る。また、材料の束は前の方にあり、膝元に小刀様の物を置く。

唐紙師は、剃髪し、小袖、袴姿。腕捲りして四角い作業台の前に坐し、右手に刷毛を持って、台の上に束ねた紙に色を塗っているところと思われる。台の上の紙には、空色の刷毛目模様を描かれている。同様の紙、周圍に三束と一枚。台の横に、丸い台に載せた絵具を入れた器と曲物。曲物には、雲母でも入っているのであろうか。白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は、周圍の紙の描き方に、それぞれ小異あり。白石本は、紙はすべて白のまま。白石本、忠寄本は、絵具の入れ物も曲物。白石本、類従本は、絵具の入れ物の中は白のまま。忠寄本は、曲物二つとも黒く塗る。

二十四番 一服一錢 煎じ物売

【職人尽】

〔飛鳥井雅康 職人歌〕一番左 医者

思わひさてもいか、はせんしもの恋のやまひの葉ならねは

〔吾吟我集〕寄茶筌恋 うきふしよ茶筌の竹のほいなくもあはでふられて心消え消え 〔貞徳百首狂歌〕盧橘 陳皮には
ならぬ先より橘の匂ひをきくぞ気の葉なる 〔春駒狂歌集〕煎茶によせて不逢恋を 忍ぶれど色には出端煎じ茶のあはで
立つ名や釜の口惜し 〔狂歌ますかがみ〕寄茶述懐 茶筌の淡とやついに初昔うちうち暮らし月日たつ間に 〔狂歌種ふ
くべ〕寄茶祝 念頃な中は次第に濃茶にて釜ちんちんと千世も替らじ 〔狂歌活玉集〕寄茶店恋 かけよかし思ひのたけ
を汲みて茶のあはれ一夜の床の情を 〔誹諧職人尽〕一ふく一錢 雷や門の茶に寄る物語へ伽香 茶ばかりと狐鳴くな
り枯れ薄へ涼菟 関守も寝られぬ須磨の新茶哉へ支考 宿はづれ霜消ゆる間は朝茶めせへ如泥 連翹や茶に山吹を
捨てさするへ巴静 あが国の名に負ふ茶あり構うけへ午橋莊 杏英 夕涼み橋のたもとや袖引茶へ佳節 風薫る一
ぶく一錢宇治の里へ琴鶴 棚橋や大和なでしこ爺が釜へ水馬 うづら野や旅の飪の立ちながらへ硯寿 茶売迄裕に
なるや大手先きへ一壺 煮えばなの罐子の蓋やくつはむしへ如尺 一ぶくに一錢浮くや池の蓮へ寥和 せんじ
物師 酒売もせんじ茶で見よ姥楼へ重頼 茶も月の名に合はせけり後むかしへ老鼠 独吟の内に どこでがな湯立て
初めん永き日に 飲み手もあらぬ此の荷ひ茶屋へ貞徳 虫籠に果報こそ茶の余り水へ来至 風引きの雪の戸開くやせ
んじものへ不尺 待つ花や目のつく所に荷ひ茶屋へ淀 等丈 道芝や十夜御命講を荷ひ茶屋へ雪鷹 来よかしの時
雨の雨や煎じものへ寥和 〔江戸職人歌合〕十六番右 茶屋 秋といへば茶に浮かされし心地して寝ぬ夜あまたに月を
見る覧 左右共無申旨……右も、月を見てあはれに思ひ入るとはなくて、茶に浮かされし心地せん事、頗る情なくや。
なずらへて為し持。池の尾の深き契りと思ひこし夜をうち川のみづからぞうき 左右又申旨なし。判云……右は、哀

れ深し。尤も為勝。

【本文】

二十四番

左

のむ人もおほ水のみになつる 茶の
さもすみはつるよはの月哉

右

あたひなきよるをはいか、せむ し物
月みあそひにかふひともかな

左哥、のむといふこと葉二あり。もし つ、き
たると心えたるにや。病と申へ し。

右も、風情つきて聞ゆ。このせむし物 は、左の
やまひ哥にのますへくや。いかさま持たる へし。

たつる茶のあはれきゆとも逢 ことの
一せにかふるいのちならはや

おもひわひさてもいか、はせんし もの
恋のやまひのくすりならねは

左、たつる茶のあはれとつ、けて、一錢 をひと
せにとなすらへたる、いとやさしくきこ ゆ。右は、
いか、はせむし物、恋の病の薬になら ぬと

二十四番 左―〔明〕左 二十四番〔類〕七十一番歌合中廿四番

哉―〔類〕かな

右―〔類〕ナシ

せむし物―〔忠〕〔明〕〔類〕せんし物

ひと―〔類〕人

左哥―〔類〕左歌 こと葉―〔類〕詞

心えたる―〔類〕心得たる

この―〔類〕此 せむし物―〔明〕せんし物〔類〕煎し物

きゆとも―〔類〕消とも

いのち―〔類〕命

おもひわひ―〔類〕思ひわひ せんしもの―〔類〕せむしもの

くすり―〔類〕薬

せむし物―〔忠〕〔明〕せんし物〔類〕煎し物

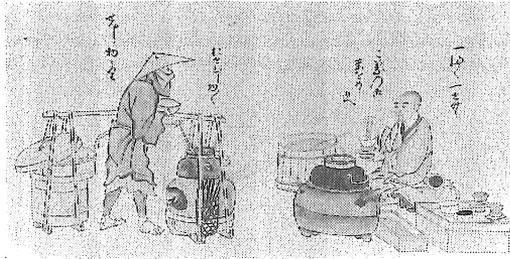
思わひたるも、あはれにきこゆ。猶持に侍へし。

◇

◇

一ふく一せむ
こ葉の御
茶をめし
候へ。

せんし物うり
おせむし物、く。



猶〔類〕なを
侍へし〔類〕侍るへし

一ふく一せむ〔白〕〔類〕一服一銭〔忠〕廿四番一服一銭〔明〕
こ葉の御茶を〔白〕〔忠〕〔類〕こ葉の御茶 一ふく一銭

せんし物うり〔白〕煎し物売〔忠〕廿五番煎し物売〔類〕煎し物売
おせむし物、く〔白〕せんし物、く 陳皮、マクリマ、甘
草〔忠〕〔類〕おせんし物、く

【語注】

◎一服一銭は、茶を一服につき一銭で売る商人。月、恋の両首、および絵から判断する限り、抹茶を飲ませたものと
思われる。縁日などに担い茶具で立売りするのが通例であったが、社寺の門前に小屋がけして一銭茶屋と称されるに

至った(国史大辞典「一服一銭」の項)。狂言「今神明」に登場する茶屋は担い茶屋による立売りであるが、「薩摩守」の一服一銭の茶屋は、店を構えているのであろうか。上杉家本『洛中洛外図屏風』の東洞院五条坊門通の路上(右隻第三扇)、千本間魔堂境内(左隻第二扇)や狩野秀範『高雄観楓図』には、担い茶屋の商人が描かれている。それらの図は、右の煎じ物売の図に酷似するが、茶筌を用いているので、一服一銭であろうと推定される。本職人歌合の絵では、風炉を据えてその前に坐している。そのような図も、舟木家旧蔵本『洛中洛外図屏風』の、豊国社棧門前(右隻第一扇)などに見ることができ、職人歌合に初出。

煎じ物売は、茶、枇杷葉、陳皮、乾薑などの薬草を煎じて売る商人。絵によると、担い茶屋を担って行商していたらしい。職人歌合に初出だが、似た職種としては、『三十二番職人歌合』十四・三十番に地煎煎売がある。また、『飛鳥井雅康 職人歌』一番左の医者之歌が、本職人歌合の煎じ物売の恋の歌と同じである。

◎のむ人もおほ水のみにたつる茶の 「飲む人も多(し)」から、「大水呑」と続くのであろう。「大水呑」は、大きな水呑茶碗と思われる。飲む人も多くて、大水呑に点てる茶のように、「大水呑」は、大

◎さもすみはつるよはの月哉 大水呑に点てる茶のように、月が澄みきっている、というのである。茶が澄むのは、大きな水呑を使うので、泡がうまく立たないのであろう。その失態を、月を褒めることに転じたところがおもしろい。

◎あたひなきよるをはいか、せむし物 「値なき夜」は、この上なく価値ある夜、つまり秋の良夜をいう。それに、煎じ物が売れずに代金が取れない夜の意を掛ける。秋の良夜、ないし、煎じ物が売れない夜をどのように過ごそう、の意の「いかがせむ」から、「煎じ物」と続ける。なお、恋の歌にも同様の技法を用いる。

◎月みあそひにかふひともかな 月見遊びのついでに、煎じ物を買う人がいればなあ。

◎のむといふこと葉二あり 一首の中に「のむ」という言葉が二度使われている。このようなことは、「文字病」、「同字病」として問題にされた。九番語注「る、の病」の項参照。

◎もしつ、きたると心えたるにや 「文字続く」は、「腰の五文字も続かぬやうにこそ聞こえ侍るはひがごとく」とや、と人々申さるめれ」(源宰相中将家和歌合、九番判詞)、「右、わたつみにみくづと詠むらむ事覚え。川にこそ詠

むめれ。されども、文字続きたるやうなりとて、右勝」(『袋草紙』下、古今歌合難、無動寺歌合)などのように、言葉続きがなめらかで、よく意味が通じることをいうが、ここで具体的に何を言おうとしたのか未考。

◎風情つきて聞ゆ 「風情」は、歌の趣向ないし着想。「風情尽く」は、「拾遺ヨリ後、ソノサマーニシテ久シクナリニケルユエニ風情ヤウヤウ尽キ」(無名抄)、「これは万葉第七卷譬喩歌にて、挽歌などにもあらず侍れば、風情述尽きて、本歌に用ゐて侍りけるにこそ」(龜山殿五首歌合、十三番判詞)、「左歌は……風情の尽きぬるにより、耳遠き旋頭歌をさへひきゐて侍れば、勝負などの事は思ひもかけ侍らぬを、右の歌の沙汰に及ばず」(前撰政治家歌合、六十番判詞)などのごとく、さまざま趣向が使い古されて手詰まりになつた状態、また、その結果、趣向の目新しさを求めて奇抜に走ること。本職人歌合では、他に、二十八番右、冠師の月の歌に對して、「右は、殊の外に風情尽きたり」、五十三番左、葛造の月の歌に對して、「左、風情尽きて聞こゆ、見苦し」と評した例がある。ここは、歌に「値」という俗語を用いた点について言つたかと考えられる(十五番語注「あたひといふ詞、哥にも侍らめと、なにとやらむいやくきこゆ」の項参照)。なお、伝統的な歌合に、「いかにせん競ふ木の葉の木枯らしにたえず物思ふ長月の空」という歌に對して、「右は、いかにせんとおけるより、風情尽きにけるにやと聞こえ侍れば、尤以左可為勝」(千五百番歌合、七百六十九番判詞)、「いかにせん手をわかるべき折しもあれ人にあふぎの風ぞ秋なる」という歌に對して、「左は、いかにせんとおけるより風情尽きにけるにやと聞こえ侍れば、尤も右をもて勝と定めらるべきよし申しき」(前撰政治家歌合、二百番判詞)などと評した例がある。歌に「いかにせん」という言葉を使つているところからして、いかにも趣向が手詰まりになつたように見える、とややふざけて評したのである。ここは、それらをまねて、「いかがせむ」という歌の言葉を茶化しているのであろう。

◎このせむし物は、左のやまひ哥にのますへくや 「病歌」は、歌病のある歌。右歌の煎じ物を左の病歌に飲ませたらどうだろう、とふざけたのである。

◎たつる茶のあはれきゆとも―「点つる茶の泡」から感動詞「あはれ」と続ける。点てる茶の泡のようにはかなくも消えて(死んで)しまおうとも。なお、泡が消えるのは、茶の質が悪いか、茶を点てる技術が劣るのであろう。

◎逢ことの一せにかふるいのちならばや 「逢ふことの一瀬」は、一度の逢う瀬。一度の逢う瀬と引き換える命でありたい、すなわち、たった一度だけでも逢うことができるならば、それと引き換えに死んでしまってもよい、というのである。命懸けで逢いたいと思う気持ちを詠んだ例は、「命やはなにぞは露のあだ物を逢ふにし換へば惜しからなくに〈友則〉」（古今集、十二、恋歌二）、「一たびの逢ふ瀬に換へし命なれば捨ても惜しみも君にのみこそ〈院冷泉〉」（風雅集、十二、恋歌三）など、伝統的な歌に数多い。「一瀬に」に、「一銭」の訓読「ひとせに」を掛ける。

◎おもひわひ…… 『飛鳥井雅康 職人歌』一番左、医者之歌と同じ。

◎さてもいか、はせんしもの さてどうしよう、の意の「さてもいかがはせん」から、「煎じ物」と続ける。

◎恋のやまひのくすりならねは 煎じ物は各種の効能があるが、恋の病の薬ではないから。「恋の病」という語は、「かくばかり恋の病は重けれど目にかけさげて逢はぬ君かな〈内大臣小大進〉」（金葉集、八、恋部下）など、歌にも用いられる。また、恋の病に薬がない、という発想も、「いかにせむ逢ふよりほかの薬なき恋の病に沈む我が身を〈実清〉」（久安百首、恋二十首）に、すでに見られる。本職人歌合にも、三十四番左、医師の恋の歌に、「あはれ我が恋の病ぞ薬なきうき名ばかりを断ち物にして」とある。なお、この歌は、ここの「思ひ侘び……」とともに、『飛鳥井雅康 職人歌』では、医者・陰陽師の番いとなっている。

◎一銭をひとせにとなすらへたる、いとやさしくきこゆ 「準ふ」は、あるものが他のあるものに匹敵すると見做すこと。ここでは具体的には、「一銭」という俗語と「一瀬に」という雅語とを掛詞にしたことをいう。それを「やさし」と褒めるのは、勿論、冗談である。「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう（和歌大辞典「やさし」の項）。

◎せんし物うり 忠寄本に「廿五番」とあるのは、誤写。次の琵琶法師に「廿五番」とあるべきところ。

◎おせむし物、く 白石本は「せんし物、く」。いずれにしても、ある独特の調子でこのように言って売り歩いたのであろうことが、狂言「煎じ物」から窺われる（参考参照）。また、白石本は別に、「陳皮、マクリマ、甘草」と記す。これも声り声であらう。

◎「こ葉の御茶をめし候へ」白石本、忠寄本、類従本は、「を」を脱す。「こ葉」は未考。『嬉遊笑覧』十は、「こはは小葉にて小芽の茶といふ」とし、『日本職人辞典』は、「古茶」と解し、古茶の方がよく出るのだという（「一服一銭」の項）。『中世職人語彙の研究』は、『大言海』の説を受けて、「粉葉」であり、すなわち、抹茶のことだとする（「一服一銭・こは」の項）。一服一銭が抹茶を売る者だとすると、「小葉」、「古葉」というのは無理なように思われるが、いずれにしても、他に用例を見ない言葉である。「候へ」は、取り敢えず、「ソウエ」ないし「ソエ」と読んでおくが、「ソウラエ」または「ソロエ」かもしれない（一番語注「めされ候」参照）。

【繪】

一服一銭は、剃髪し、僧衣を着、腰に提鞆と燧袋を下げる。坐して、左手に茶托に載せた茶碗、右手に茶筥を持ち、茶を点てているところ。前に釜をかけた風炉、柄杓と水の入った結桶。別に、水の入った四角い箱。これは茶碗を濯ぐためか。左に茶器の入れ物と思われる四角い箱を置き、その蓋を裏返した上に、茶碗や棗と思われる道具類を載せる。白石本、忠寄本は、茶杓を加えるなど、道具類の描き方がやや異なる。剃髪し僧衣を着ているのは、喫茶の風が寺院から起こったことの名残か。狂言「通円」では、茶屋の主人のことを「茶屋坊主」と呼んでいる（天理本・虎明本）し、虎明本狂言「今じんめい」のト書部分でも、茶屋のことを「ばうず」と記している。『犬つくば集』にも、「ちはやふる三輪山もとの茶屋坊主」の句がある。これは近世の茶坊主にも繋がって行くものであろう。ただし、上杉家本や舟木家旧蔵本『洛中洛外図屏風』、狩野秀範『高雄観楓図』などの一服一銭は、有髪である。

煎じ物売は、笠を被り（剃髪しているのであろう）覆面をし、柿色の衣を着て、脚絆（類従本は、脚絆を描かない）、草鞋履き。腰に提鞆を下げる。担い茶屋の横に立って、左手に茶碗を持ち、右手の柄杓で、荷い茶屋の釜から煎じ物を汲もうとしているところ。担い茶屋は、天秤の一方に釜をかけた風炉と薪を入れた籠、風炉の下に曲物（用途未考）、もう一方に茶碗を入れた曲物の桶を付ける。なお、虎明本狂言「せんじ物」の注記に、「茶屋（煎じ物売） 出立は、狂言袴前を取り、腰帶、編綴、頭巾、編み笠の前に、手拭、覆面のごとく作るなり」とある。

【参考】

○茶屋の屋根漏るやあられの鐘子哉

(犬つくば集)

○かさを持たねば茶屋へこそ寄れ

いとどだに食ふべき餅に雨降りて

(同)

○坂の者内野の茶屋に腰かけて

神祇くわんずの弦や召されん

(同)

○喉の渴きはただ富士の山

田子の浦に打ち出でてみれば茶屋もなし

(同)

○神の世よりの杉のづんぎり

ちはやふる三輪山もとの茶屋坊主

(同)

○亦於「路頭見物衆之場」、年齢漸不惑余之桑門、長高色黧黒面黧顔、而鼻鼓、瀝瘍形、頑心、鬚而少嗔甚訛兮、著上唐布入桔帷与「薄短精強炮衣」、以「柿团扇」麾「煎物壳」、高声喚寄、泥顔而問曰、汝所「調煎物者」、其「薬種」何々耶、彼煎物壳、返々余為「不詳」云々、而敢不得「意」、乍「思答」曰、薬種惣雖「万端」今少々言「之」、先、天南星、地骨皮、檳榔子、高良香、人參、鬼箭、甘草、苦辛、丁子、貝母、山梔子、柴胡、桂心、玄參、黄老、川大黄、金牙、銅鼻、龍腦、虎膽、五味子、陳皮、川芎、鶴虱、烏頭、三稜根、白朮、黄連、白朮、紫檀、赤芍藥、胡椒、茯神、鼈板、益智、青木香、白芷、栝楼、烏梅、龍齒、地床子、杏仁、鹿茸、鱉甲、石斛、雞舌香、前胡、阿魏、沢瀉、防風、赤銅屑、白树脂、蜜陀僧、訶梨勒等也

(桂川地蔵記)

○本朝以「梅尾山茶」為「第一」。宇治次「之」。梅与「梅」、字相似。故「通」而用。近代好「茶」者、以「宇治」為「第一」。梅尾次「之」。本「朝諺」謂「之」、好「茶」者「曰」數寄者「也」。又諺曰「之」、至「宇治茶」、有「清音」。余「皆濁」音。又、有「宇治茶」之別称「也」。曰「無上」、曰「別義」、曰「極無」。然則「之」、縱雖「為」酥酪醍醐、「不可」為「茶之上」。况「之」、於「酒」乎。

(蘭叔玄秀「酒茶論」)

○惣じてあの茶といふものは、余の草木にもかはり、春にもなれば、萌え出づる梢をむしり取られつつ、熱鉄の湯の中に、茹でつ蒸されつ、その上に焙炉ほいろの火にて焙られ、人里遠き愛宕山に追ひ上せられて、落縁の下に置かれ、秋風のそよぐ比にもなりしかば、口切りといひて、石の白にて挽かれつつ、茶杓の責めを受くる身が、我らを誹り申すこそ、中々憎き仕方なれ。いざ打ち寄せて退治し、末代に至るまで、詮なきにが茶を絶やすべし。

(別本「酒茶論」)

○若衆みな脇の居座の方へなをりて囃すうち、坊主出る。担い茶屋を持つて、笠に覆面して、十徳、腰に団扇を差して、橋懸のシテの松のあたりに、担い茶屋を下ろいて、又笠を脱いで、手に持つて、みなにめでたいと云ふ辞宜を云うて、笠を棒にかけておいて、茶碗柄杓を取つて一度すすいで、扱汲んで、煎じ物と云うて行く也。

(天理本狂言、せんし物)

○煎じ煎じ、煎じ物召せ、煎じ物召せ、陳皮乾薑ちんぴかかんきやう加へて煎じたる、お煎じ物召せ、煎じ物めせ、痰を切らひてお声の出で候、お虫の薬も加へ加へて煎じたるお煎じ物、お煎じ煎じ、煎じ物召せ、煎じ物召せ、かほどにしひたる煎じ物は、またとあるまひ、煎じ物召せ、寿命長遠息災延命のお煎じ物

(虎明本狂言、せんじ物)

○うたてしの旅人達や、何とて茶をば飲まざるらう、飲まぬこそ道理なれ、く、檜木茶桶に焙烙ほいろ鑊くわ子に、伊勢水呑の端の欠けたに、天道干しの暇乞わずを、飲まぬは人の道理なり、さらば茶点ての見目がよいか、く、きわめて色の黒顔に、はいほなどをすつばと付けたる顔を見れば、焼け山に霜の降つたに、少しも違わぬおかしさよ、よくよく思へば我等が商ひ、今この茶屋にて身をば立つまじ、いざ打ち捨てて此の茶屋を、捨てて都に帰りけり

(天理本狂言、今神明)

○へしいしい、申し。へ何事ぞ。へ茶代わりト云。へ茶代わりとは何の事ぞト云。へ旅する者が茶代わりと云ふ事を知らぬと云ふ事がある物か。此の茶屋は一服一銭に定まつたほどに、お出しやれト云。

(天理本狂言、さつまのかみ)

○扱も此の宇治橋の供養、今を半ばと見へし所に、都道者とおぼしくて、いざ通円が茶を飲み干さんと、名告りもあ

へず三百人、口脇を広げ茶を飲まんと群れ入る、旅人に、大茶を点てんと茶杓さしやうをおつ取り、簸屑ひきどもをちやちやと打ち入れて、浮きぬ沈みぬ点てかけたり、通円下部を下知していわく、水の逆巻く所をば砂ありと知るべし、弱き者には柄杓びしやくを持たせ、強きに水を担わせよ、ながれ者には茶筥ちやぶを持たせて、互いに力を合わすべしと、ただ一人の下知によつて、ちやばかりの大場なれ共、一騎も残らず点てかけ点てかけ、穂先を揃へて爰を最期と点てかけたり、去るほどに入り乱れ、我も我もと飲むほどに、通円が茶のみつる、茶碗柄杓も打ち割れば、是までと思ひて、是までと思ひて、平等院の縁の下、是なる砂の上に団扇を打ち敷き、衣脱ぎ捨て坐を組み、茶筥を持ちながら、さすが名を得し通円が、埋み火の燃へたつ事のなかりせば、湯のなき時は泡も点てられず、跡甲い給へ御聖、かりそめながら是とも、ちやしやうの種の縁に今、団扇の砂の草の陰に、ちやち隠れ失せにけり、跡ちやち隠れ失せにけり

(天理本狂言、通円)

○つうゑんがあに一休作 一服一銭一期内 最期一念温客泡

(虎明本狂言、つうゑん、注記)

○うなりおぼどこまで送るべし関山せきやま、関山関寺室積や室が関、送りつめたよあれ見よ兵庫の築島、急げ遅いほそ子峠この茶屋が近いぞ

(田植草紙)

○いざいざ戻ろう今日の日を見よやれ、日も下がりたに今日日を見よやれ、編み笠は茶屋に忘れた、扇子は町で落といた (同)

○日本人は、茶の用法を学んだシナにおけると同じように、昔は茶チャを煮出して飲んでた。今でも日本のある地方では下層の人々や農民の間でそれを飲んでる。それを煎じ茶ケンチャというが、煮たチャの意である。しかしながら、その後、時がたつにつれて、茶そのものを飲むようになった。それはまず干すか焙るかした葉を、小さくしてこぶるよく出来た黒い石の臼で、細かい穀粉のように緑色の粉末に碾く(碾き茶、抹茶)。白はそのためにのみ使われるもので、茶臼チャウスと呼ばれ、茶チャの白の意である。このようにして碾かれた緑色の粉末は、上質の漆ニスの小筥コウ(薫)、または同じ用途を持った陶土の小さな一種の壺茶入れに入れる。そして、それ専用の竹製カネの小匙コシ(茶杓)で、これらの粉末を取って一匙か二匙磁器(茶碗)に入れ、この場合のためにいつも用意してある沸騰した湯をすぐその上

に注ぎ、かねてこのために調えてある竹製の小さな刷毛カシ〔茶筌エスコワイニヤ〕で、優雅に、かつ器用にそれを攪きまぜる。そうすると、緑色の茶ココロの粉末が溶けて粒がなくなり、同じ色をした湯のようになる。このようにして茶そのものを飲む。

（日本教会史、一卷三十二章）